

児童文学の創始者

巖谷小波



1870年(明治3年)―1933(昭和8年)東京生まれ。水口出身の書家巖谷一六の三男。童話作家、小説家、俳人。日本のアンデルセンともいわれ、お伽噺を中心に絵本や唱歌、お芝居にも活動を広げた。

お伽噺の世界を開拓

子どもたちに愛された

郷土の

偉人

2人の足跡

子どもの知的好奇心や感受性を育む絵本。色鮮やかな挿絵やわくわくするストーリーが子どもの心をとらえます。

市内にも、今も昔も子どもたちに親しまれている作品を作った偉人がいます。児童文学の創始者と言われる巖谷小波と、乗物絵本作家として活躍した安井小弥太です。彼らの仕事は、文字や言葉、絵が持つ力やそこから発する想像力によって多くの人々に感動と夢を与えてきました。

2人の業績は、歴史を越えて共有できる私たち市民の財産です。水口・土山歴史民俗資料館では2人の足跡をたどる作品展を順次開催しています。

乗物絵本作家

安井小弥太



1905年(明治38年)―1985年(昭和60年)土山町生まれ。土山小学校卒業。乗物絵本作家。写真は大磯の自宅にて、初めて自分の作品が子ども向け学習雑誌の付録になったことを記念して(安井兵太郎氏所蔵)

水口歴史民俗資料館には父一六とともにその業績を紹介する「巖谷一六・小波記念室」が設けられています。

100年間 歌い継がれる校歌

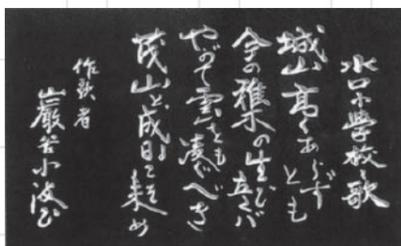
水口小学校

小波は東京生まれですが、水口は巖谷家の故郷であり、妻も水口生まれで、この地に愛着を持ち続けていました。特に水口小学校との関わりは深く、明治43年には校歌を作詞し、以来100年もの間、歌い継がれていいます。同校の岡村保校長は学校での取り組みを次のように話されています。

当校では、児童が水口ゆかりの先人に関心をもってもらえるよう、機会あるごとに小波さんの話題にふれ、小波作品に親しむよう進めています。

水口小学校校歌(二番のみ抜粋)

城山高く
あらずとも
今の稚木の
生い立たば
やがて雲を
も凌ぐべき
茂山となる
日こそ来ぬ



▲水口小学校にある校歌の碑

校歌の歌詞が難しいことから、昨午、全校集会で現代語訳を呼びかけました。その後の創立記念日で児童が考えてくれた訳を発表し、歌詞の意味を子どもたちとともに考えました。1番に出てくる「稚木」は幼い木のことで、子どもをさしているのではないかと、すなわち小波さんは校歌を通じて子どもたちの成長を願うメッセージを送ったのではないかと思います。児童たちには歌詞に込められた小波さんの思いを大切にしながら学んでくれることを願っています。

水口歴史民俗資料館企画展 巖谷小波の世界

― 俳画を中心として ―
会期/9月4日(土)～19日(日)
10時～17時(月曜休館)

記念講演会 小波さんに想う

乾 憲雄氏(湖南市文化財保護審議会委員)
日時/9月5日(日)
13時30分～15時

おはなし会 小波さんのお伽噺

「すずめの学校」(長浜市)
日時/9月12日(日)
10時30分～11時30分

※場所はいずれもあじこうか市民ホール展示室、入場無料。
水口歴史民俗資料館
〒662-1714(木・金曜休館)

ふるさと土山を 愛した小弥太

幼少期を自然に囲まれた土山で過ごした小弥太は、この地を離れてからも庭には草木を生い茂らせ、緑を楽しんでいたようです。小弥太の土山にちなむエピソードを土山町南土山の竹島久代さんが語ってくださいました。竹島さんのお父さんは小弥太と同学友だったそうです。

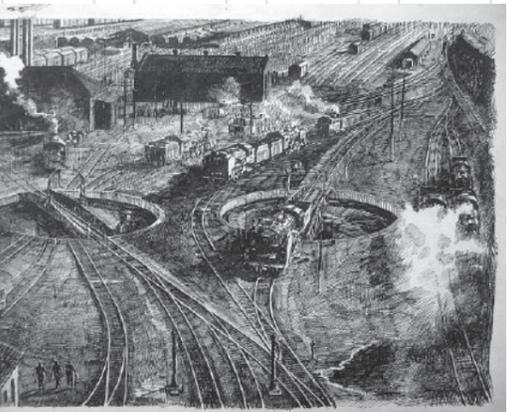
小弥太さんは、父と仲がよかったということもあり、土山に来られた際はうちを必ず訪ねてくれました。当時住んでおられた神奈川県大磯からは、毎年手作りの、いろいろな絵を描いた年賀状が届いていました。また、汽車の絵や、昔を思い出して描いたような盆踊りの絵も送ってきてくださり、これらの絵は、私が子どものころに土山小学校で行われた「安井小弥太展」で出展されたようです。

土山歴史民俗資料館企画展

こどもせかい

― 土山出身の乗物絵本作家
安井小弥太の作品を中心に ―
会期/開催中(9月19日(日))
10時～17時(月・火曜休館)
※入館無料
場所/土山歴史民俗資料館
第2展示室

水口歴史民俗資料館
〒662-1056 電話 666-1067



▶原画「朝の機関区」
1960年、関田克孝氏所蔵



▶原画「愛児絵本『はしれきしやポッポ』表紙」
1980年代、関田克孝氏所蔵

や「キンダーブック」などに多数掲載されました。終戦後、絵本の発行が自由になると、再び絵本を出し始めた各出版社で戦前をしのぐ実績を残しました。

戦前・戦後を通じて 乗物絵本界をリード

安井小弥太は京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)入学後、大正10年頃に日本画の大家北野恒富に師事し、昭和5年頃に本格的に絵本作家をめざして上京しました。

作品は、機関車や船、飛行機、自動車などの乗物を中心とし、丁寧で緻密な線を用いながらも、遠近法を多用した迫力ある乗物を次々と描き、たちまち乗物絵本画家を代表する一人となりました。視点も変化に富み、俯瞰や凝視など映画的アングルを強調した知識絵本に傑作が多く、この分野の先駆者となっています。

これらの作品は、戦前の日本を代表する幼児向け絵雑誌「コドモノクニ」